社　会　科

東雲小・東雲中社会科部

１　社会科のめざす生徒像

・社会的事象を科学的に追究し，獲得した知識や概念を，実生活や未来に役立つ社会の見方として捉え，活用できる生徒
・科学的な社会認識に基づき，社会的事象を多面的に捉え，価値判断・意思決定できる生徒

社会科では，子どもの公民的資質を養う上で，社会を知り，わかるといった子どもの社会認識形成を第１とする。社会の中に存在している様々な社会的事象やその因果関係を通して，社会の仕組みに関する知識や概念を探究し，それらを実生活や未来社会に役立つ社会の見方として育んでいく。

もう一方で，その育んだ見方を総動員し，社会の様々な事象や問題に対し，自らの考えを判断・表現していく力も必要である。刻々と変化する現代社会では，社会的事象を捉える価値も多様化し，社会のあり方も複雑化している。子どもたちが社会に適応し未来社会を形成していくためには，これまで育んだ社会の見方を生かし，自分や社会のあり方を方向付けていく考え方を育むことも重要である。

２　研究主題に対する基本的な考え ～社会科７年間の子どもの「学び」を育む授業づくり～

「教育内容の論理」に「子どもの心理」を結びつけた
子どもの「学び」を育む社会科授業の創造

科学的な認識内容を教科の根幹とする社会科は，多様かつ急速な変化を遂げる社会そのものが学習の対象である。そこで見られる様々な事象には，複雑に絡まりあった要因が存在している。子どもの発達段階に応じて，社会的事象の背後にある概念や規則性を習得することは，社会科という教科において必要不可欠である。科学的な知識（内容）を科学的な思考活動（方法）で学ぶことを「教育内容の論理」とし，授業の柱とする。

しかし，それだけでは不十分である。知識の習得を論理的道筋で考えるあまり，子どもの思考とかけ離れては意味がない。学びの主体は子どもである。これまでの生活経験や社会的事象に対する興味・関心，疑問のもち方等，「子どもの心理」を考慮する必要がある。

認知心理学者の森敏昭は，「知識の創造に繋がる学び＝真の学び」とし，「①それをやるのが楽しく②学校が心を成長するための場所であり，③自分の将来に役立つと納得できる」ものであることを学びの条件として挙げる。社会科授業で子どもの「学び」を成立させるには，子どもの知識獲得過程を考慮し，それを教師が支援することができる授業設計，そして小さな社会としての学級や学校における学習環境づくりが基盤となる。

３　研究の焦点化－社会科でつけたい力とその手立て－

（１）教科テーマと設定理由

社会の仕組みやその有用性を実感できる授業づくりを通して
実生活や未来社会に生きて働く見方・考え方を育てる。

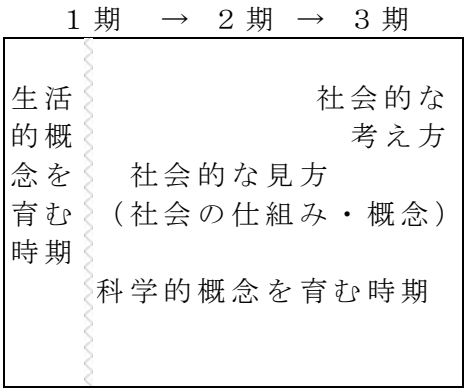
発達段階や実態を踏まえた学習材の選択，単元構成の工夫，子どもの思考を踏まえた授業展開によって，子どもたちが社会の仕組みやその有用性を実感できる授業を目指す。

子どもたちが学習材を通して，社会の仕組みや概念を捉え，その価値に気付くことができれば，社会に対する自らの見方を育むことになる。また，実生活とのつながりや社会変化から，未来を意識化することができれば，将来の自分や社会のあり方に関する主体性を育むことができ，意見交流など他者との関わりを通して，社会に対する多様な見方・考え方を育むことにも繋がる。それらは「子どもの心理」に沿ったものであり，未来に役立つものとして，子どもの納得感が得られるものであればあるほど，未来に生きて働く見方・考え方として培われ，実生活や未来社会での意識的・随意的な活用を可能にすると考える。

（２）教科テーマに迫るための各発達段階での重点

社会の仕組みやその有用性を実感できる授業づくりを行う上で，「学び」のつながりや児童の発達段階を考慮した場合，次の表のような方策が必要である。

まずは社会を見る目を育むことが重要である。１期では，生活に身近な具体を基に操作体験する活動を，２期では客観的な資料を基に集団や個別で考える活動を中心に，科学的知識を捉えていく。論理的思考が向上するこの時期に，科学的概念をじっくりしっかり丁寧に育み，社会的な見方として活用できるよう，現代社会に適応するための素地を培う。また，３期でも引き続き取り組むことで，時間をかけて生活的概念と科学的概念の相互浸透を図り真の科学的概念の形成を目指す。



【各発達段階における重点】

一方，子どもの社会的な見方の定着程度に応じて，社会的な考え方も育んでいく。３期を中心に，社会の様々な事象や問題に対し，創造的・批判的に考えたり，これまで培った見方から多面的に物事を捉え，自分なりに根拠を示して判断したりすることを大事にし，社会の形成者としての素地を培う。

学校という集団での学びの中で，他者との関わりを通して，個の伸長を高めていく。

４　テーマ実現のための授業設計

（１）学習材の選択

子どもの「学び」を育むためには，まず子どもの実態把握が必要である。発達段階や特性，興味・関心を探り，学習材を絞る。次に徹底した教材研究を行う。学習材に関する文献や先行研究，取材等から幅広く情報を収集し，上記に最も適した学習材を選定する。

（２）学習課題の設定と単元構成

驚きや切実感を伴う課題は，子どもの学びの原動力となる。その為にはまず子どもの生活的概念を揺さぶる社会的事象を見つけることが必要である。構造的には，複数の視点から多面的に迫ることで解決できるものとする。子どもが吟味検討しながらそれらの視点に気づけるように，社会の仕組みを導く内容（知識）や問いを構造化する必要がある。構造化は，単元を通して獲得すべき知識を吟味・精選するとともに，単元を構成する手だてともなる。

（３）学習活動について

単元に活動を組み込むことは，学習材に対する子どもの興味・関心を高め，活発な意見交流を促す上で重要である。しかし，大事なのは活動することではない。活動を通して社会を実感し，社会の仕組みや変化等，社会を捉える見方に繋げることが重要である。

５　今年度の研究計画

（１）昨年度の研究成果と課題

本校社会科部では、昨年度、上記にあるようにテーマ実現のために学習材の選択、学習課題の設定と単元構成、学習活動の三点の視点を踏まえ授業構想、実践を行うことで学びのつながりにおける成果と課題を明らかにしようとした。テーマ実現に向けて各段階で授業実践を行った結果，以下のような知見を得ることができた。

・「生活概念と科学概念ののぼりおり」という表現より，「生活における具体的事象と一般化される科学概念ののぼりおり」と表現する方が適切ではないか。事例と概念におけるのぼりおりは，どの学年でも可能ではないか。各段階の差は，学習内容の質的違いと捉えるべきである。

・授業の主体が子どもであることを鑑みて，学び合いの観点は必要である。集団での学び合いと個の学びのバランスを考えないといけない。

・授業づくりにおいて大切なこと。

①社会が分かるようにすること。具体的できちんとした教材研究が欠かせない。

②教育としての教科経営や学級経営。子どもが学び合い，子どもに訴えるものがあること。

・単元に活動を組み込むことは，学習材に対する子どもの興味関心を高めて活発な意見の交流を促すために必要である。活動を通じて社会を実感して社会の仕組みや変化など社会を見る見方につなげることが重要である。

（２）今年度の研究計画

昨年度研究してきた教科テーマの実現のための研究は、引き続き継続する。上記にあるように昨年度の研究より､事例と概念におけるのぼりおりはどの学年でも可能ではないかと考えた。そこで今年度は、各段階でのぼりおりの特に方法の質の違いについて注目して、子どもの学びを検証したいと考えた。

Ⅰ期【のぼり重視】

事例について調べたり考えたりして学習して分かったことをさらに検証することで学んだことを深めて、一般化することができるのではないかという授業仮説を検証する。

Ⅱ期【のぼり→おり】

事例について調べたり考えたりして学習したことを一般化することができる。さらにその一般化したことがほかの事例に当てはまるかどうかを検証するなど、演繹的に考えることができるのではないかという授業仮説を検証する。

Ⅲ期【おり⇔のぼり】

演繹的な思考については，すでにできるものとする。事例について一般化し、そして他の事例に当てはまるかどうか演繹的に調べ考えることができる。さらに、他の事象にも当てはまるかどうか帰納的に検証して学習を深めることができるのではないかという授業仮説を検証する。

６　成果と課題

【Ⅰ期】

広島のカキ業者の連携，広島ブランドを支援する連携を通して，互いが協力し助け合うことで生産している県，地元企業，市民，業者が連携して広島カキを守る仕組みを捉えることができた。宮城を守ることは，広島を守ることというカキ業者の言葉から，児童は容易に宮城を支援する体制をとらえることができた。一つの概念を探究する授業を実践することができた。課題としてはカキ業者の範囲内で一般化が終わってしまった。世界の相互依存まで入ることで，より深い仮説の検証をすることが可能だった。

【Ⅱ期】

資料や事前学習を根拠に考えを深める授業構成とした。その結果マツダを通して日本の工業全体の特色,日本の工業の将来についてマツダの事例をもとに一般化して考えることができた。イノベーションによる企業戦略として教える必要があった。目標を企業戦略とするべきであり，企業そのものの戦略を焦点化する必要があった。マツダに特化した授業に偏り，児童がスムーズに思考して，一般化することができなかった。

【Ⅲ期】

身近な地域の歴史である安芸門徒の成立やその発展について,彼らに対する共感的立場から，社会生活と信仰生活の関連について，どの授業でも一定程度理解を促すことができた。しかし，逆に共感に重みを置きすぎることで分析の視点がおろそかになり，他の宗教・宗派について，信仰を具体的な生活に結びつけた形で十分に一般化することはできなかった。

【７年間の学びのつながりを意識した授業づくりについて】

社会科で７年間の子どもの育ちをどう見取り，どう伸ばすのか。東雲の子どもたちがどう伸びていくのかを整理して考える必要がある。

そのために来年度は，もう一度仮説を検証してそれを達成する手段についてこの２年の研究成果をもとに検証したい。そして小学校は小学校で，中学校は中学校でそれぞれが小中の立場や教科における子どもの課題を見据えて授業改善することが大事であることをわすれず，研究を続けたい。

【参考文献】

木村博一，「初等教育学の構想」『初等社会科教育学』協同出版,2002.
木村博一，「新しい学びにもとづく社会科授業開発の基礎基本」『社会認識教育の構造改革-ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発－』社会認識教育学会,2006.
岩田一彦．『社会科授業研究の理論』明治図書，1994.